

ディルタイにおける「体験」について

塚 本 正 明

いわゆる歴史的生の哲学者ディルタイにとって、その根本概念は勿論「生」Lebenであるが、この「生」の具体的契機としていわば三位一体的連関を成すのは、言うまでもなく「体験」・「表現」・「理解」である。この場合、図式的にみると、「体験」は「生」の内化面、「表現」はその外化面、そして「理解」はその統一面として把握られることもできる。しかもこれら三位一体的連関の統一的全体を問題とすることは、ディルタイにあつては、とりもなおさず「人間的＝社会的＝歴史的世界」つまり「精神的生」の世界を問うことに他ならない。しかし本稿では一応ディルタイ固有の「体験」の概念に的を絞って論述することにした。 (なお本稿は、修士論文「ディルタイにおける歴史的世界の研究」中の第1章第1節を、若干補筆訂正したものである。又、引用箇所は簡略のため省いた。)

1. 自然科学と精神科学 (物理的自然と歴史的世界)

(1) その対象からみた両者の相違について

ディルタイによれば、両科学の分離は「内容の原理」に従う、即ち客観的存在 (対象自体) そのものの有り方の相違に基く。ではこの「内容の原理」からみた両者の相違とはより具体的に如何なるものであろうか。

まず簡言すれば、外的感性的知覚を通して得られる外的経験の与件の総体が、いわゆる物理的事実の体系、即ち物理的自然界である。これに対し、内的知覚及び内的経験つまりは「体験」 (Erleben, Erlebnis) において与えられる内的出来事・状態の事実が、精神的事実の体系、即ち歴史的精神界である。またこの場合、自然科学の対象たる自然 (Natur) が、「精神の作用から独立して産み出された現実」を含むのに対し、精神科学 (Geisteswissenschaft) は、「精神の産み出したもののみを理解する」のである。即ち「精神的内容性」たる「精神的生の構造を含む意義＝目的＝価値的連関」を理解するのである。そしてかかる「有るがままの精神的事実」は体験の内に与えられており、「精神的世界の連関 (Zusammenhang) はSubjektにおいて現れる」のである。しかもディルタイにとっては、自然ではなく精神 (Geist, Seele)こそ生きた実在性であるから、精神科学は、体験から出発し、実在性から実在性へ向う、即ち実在性を質料としてもつ訳である。精神科学の出発点にして対象は、端的に言ってトータルな意識の直接与件であり、「直接的内的な現実在 (Wirklichkeit) そのもの」、「内から体験された連関としての現実在」である。

ところでディルタイは「精神的事実」の徴表として、①「精神的事実」は、内的経験の事実を人間の身体に移し置くことにより、吾々にとって現に有る (体験の外化)、②「自己の内的経験の事実と他の人格におけるその事実との同種性 (Gleichartigkeit)、即ち追体験＝理解

(Verstehen) が可能である」、という二点を示している。そしてこの背景の下に精神科学は、体験と体験の表現 (Ausdruck) とこの表現の理解との三位一体的関係に基いており、体験されたものと凡ゆる種類の体験表現の理解とが、精神科学に固有な全ての概念や判断や認識を基礎づける訳である。つまり精神科学は、「体験しうるもの、表現しうるもの、理解しうるもの」の本性に基く固有の法則に従う固有の領域を形成する」のである。この場合、精神科学の対象は、精神界の「作用連関」 (Wirkungszusammenhang) とその創造であると言えるが、この作用連関が自然の因果連関と異なる点は、精神的生の構造に従い、価値を産み目的を実現するという精神の構造そのものに存する。即ち精神的な作用連関は「内在的目的論的性格」^{注1}をもつ訳である。そして精神界をさらに歴史的世界として把えるならば、精神科学は、①全体としての歴史的世界②作用連関としての全体③価値付与的目的措定の創造的なものとしての作用連関④全体を全体そのものから理解すること⑤価値や目的が時代や普遍史に中心をもつこと、という諸観点に従って考えられねばならない。^{注2}

かくてディルタイにおいて精神科学の対象界は、歴史的世界であり、体験＝表現＝理解の精神的生連関の世界であり、詮ずる所、「客観的精神」^{注3}の世界であるとも言える。そしてこの歴史的世界は、いわゆる必然性をもった法則に従う自然科学的因果はもたず、却って一種の力 (Kraft)^{注4}の多様性と考えられる意義＝目的＝価値の諸連関に満たされた内在的目的論的世界として把握される訳である。

注1. 内在的目的論は、いわゆる自然の目的論とは峻別され、あくまで歴史的精神的生に内在するものとして、人間的世界の圏内に限定される目的論である。

注2. この考えの内には、例えばポPPERなどが指摘するユートピア的全体主義の影を認めることもできようが、ディルタイにおいては、全体の神秘的直覚とか全体から部分へ向う形而上学的構成的方法よりも、部分の具体的な記述分析や実証的比較分類の批判的方法が先行するという点に注意しなければならない。

注3. これは実は客観化された精神であり、内的生が表現において自己を外化したものであって、かかる表現的世界への客観化において、精神的生は超個人的共同社会的世界性をもつことになる。この意味で「客観的精神」は、歴史的世界の実的一般者とも言いうるものであって、具体的には、芸術、宗教、哲学、社交、法、教育、政治、国家といった諸々の「文化体系」と「社会の外的組織態」なのである。従って、ヘーゲルの体系に組込まれた「客観的精神」とは自ら異なるのである。

注4. これは物理学の意味での力ではなく、あくまで精神科学的概念としての力であって、即ち生命的精神的内的作用連関において働く一種の精神的エネルギーである。ディルタイは、歴史的世界の全体連関の内に「交差点」として組込まれつつもそれに働きかける「心的物理的統一」としての個的現存 (Einzeldasein) を、一種の力とみている。

(ロ) その方法からみた両者の相違について

前述した対象自体の内容的相違に基いて、自ら認識方法上の相違が生ずる。そしてこの相違こそディルタイ哲学の基礎を成すものと言えよう。「自然科学的方法の精神科学への越権。精神的連関の自然への持込みは共に非難さるべきである」というのが彼の基本的確信であった。それでは具体的に方法上の相違とは如何なるものであろうか。

まず自然科学の認識目標は、自然現象の因果連関であり、法則であり、「個別態の仮設的説明根拠」であるが、精神科学のそれは、「心的構造連関」(Psychische Strukturzusammenhang)の内在的合目的的連関であり、歴史的世界における作用連関であり、又詮ずる所、歴史的現象における「類型」(Typus)^{注1}であって、この点で精神科学は類型学(Typologie)とも言えるのである。

また外的自然における連関は、抽象的概念の結合により、現象に従うものであり、「構成手段の論理的に透見しうる体系」であって、根本的にみて抽象的である。かく自然科学は、抽象(Abstraktion)によって、秩序づけらるべき現象と構成手段との同種性をもたらすことにより、その構成手段に従う訳である。ここで支配しているのは、帰納、実験及び数学的理論であり、説明(Erklärung)の方法であって、「現象の空間的連関がもつ数的可測性に基いて普遍的法則を発見」し、「量の絶対的比較可能性に限定さるべき因果の等価を原理とする概念把握可能性(Begreiflichkeit)」が自然科学的構成の理想である。

これに対し、精神的＝歴史的世界における連関は、体験され、又追理解されるのであり、これは生活環境下にあり内的経験において与えられる精神的連関であって、根本的にみて生命的(lebendig)とみられる。精神科学は、「一種の転移(Transposition)によって充全なる生命性の内へ帰還すること(Zurückübersetzen)」に依り、歴史的＝社会的＝人間の現実在を、「生の客観態」(Objektivierung des Lebens)として吾々に与えられたるままに、この現実在の根たる精神的生命性へ還元することにより秩序づけるのである。ここで支配しているのは、記述^{注2}、分析、比較(類型の直観)、類型分類という一般化の過程であり、「理解」の方法、従って「解釈学的方法」及びこれと結びついた「批判的方法」である。

^{注3}「精神科学の理想は、凡ゆる精神的生における連関と共同性(Gemeinsamkeit)とから、人間的＝歴史的な個別態全体を理解することである。」そして精神科学の特性は、この理解(知識)の主体と対象とが同一である点にある。ここで心的連関を制約している規則性、同種性、同形性(Gleichförmigkeit)及び類似性といった構造と関係とがもつ一般者の側面を明らかにするのが、Selbstbesinnungに基く「記述心理学」(「一般心理学」)的人間学的研究であり、又社会的＝歴史的世界の作用連関に定位し、個別性の側面を明らかにしようとするのが、諸領域の発展史(Entwicklungsgeschichte)の歴史的研究であり、「比較法」vergleichendes Verfahren)であると言える。そしてディルタイは、人間的＝社会的＝歴史的世界を解明するために、これら(一般)心理学の人間学的体系的方法と歴史的比較的分析的方法との結合を方法的に企投した訳である。けだし彼において体系的精神科学の最も固有の性質は、一般者と個別者との結合において成立するのであり、「個別者及び人間的＝歴史的

生の段級 (Abstufung) や類似性や類型を制約している原因的 (ursachlich) 関係」、換言すると「同形的なものが固別態を基礎づけているその内的連関」を探求することに存するのである。そしてこの一般性と個別性との内的連関に定位する「歴史的意識」が、今述べた両方法の結合を必然的に要請したのだと言えよう。

注1 「類型」は簡単に言えば、「意義性」の観点に従って心的歴史的生の事象の多様から「取り出された共同なもの」であり、個別的個性に共同共通な「本質的なもの」として諸個人の「典型」であり、又、普遍の人間性に根をもつ共同の一般的個性と言っている歴史の支配原理である。

注2 即ち、全体の観点、意義の観点からの、個々の心的事実の記述。

注3 解釈学的方法に必要な批判は、ディルタイによると(1) 文学的(2) 文献学的(3) 歴史的、の三つの批判である。これによりカントの『純粋理性批判』は、ディルタイにあって、『歴史的理性批判』へと転ずることになる。(傍点筆者)

(ハ) 両者の関係について。

以上のようにディルタイは、自然科学と精神科学を峻別しているが、しかし両者は決して単に二元的没関係的に成立している訳ではない。既に精神界にして、外的抽象的説明と内的生命的理解という異った把握の仕方によって両科学の対象となりうる訳である。又精神科学は、自然科学を基礎にして、「感官の客体において現れる精神的事実やそれらの相互連関及び物理的事実との連関を研究する」ものと規定されてもいる。

精神的生活は、何らかの有り方で物理的生活に依存しており、又精神的事実の関係は、身体において物理的性質の体系によって規定されており、従って精神的事実の体系は、物理的事実の体系をその制約及び基礎としているのである。又さらに「気候、食糧、地理的環境全体が、人間や民族や人間社会の物理的及び精神的展開を制約している」とみられる。要するに「自然の内に存する物理的出来事や必然性、又自然から出発する作用が、歴史的世界における全ての関係、行い、受動 (Leiden)、作用、反作用の基礎を形造っており、そして物理的世界は、精神がその目的や価値というその本質を表現してきた全領域の質料を形造る」のである。かく「自然の事実、精神科学の内へ、精神的内容性と結びついた価値付与に従って常にただ環境、条件、媒介手段としてのみ入り込んでいる」のであるが、何れにせよ自然は精神科学にとっても基礎的条件であり、「自然科学は、歴史的体系的に、精神科学の前提にして基礎である。」即ち「凡ゆる精神科学において、物理的事実は精神的事実と結合しており、精神的事実が物理的事実に付加している。そしてこの精神的事実は、感覚客体 (Sinnesobjekten) において現れる」とみられる。又換言すれば、「共存と継起との規則性により、精神的体系の物理的事実に対する依存が展開するその連関において、全ての精神科学の構成は成立し、精神科学は必然性と法則をもつ」ことになる。かくて自然科学と精神科学とは、根底的に次のものにおいて一致する。即ち「同形性を基礎にして、現実的なものの固別態がその内で生ずる事実総体、に関する認識の一般的規則から生ず

るもの」において。

以上ディルタイにおいて人間的＝社会的＝歴史的世界は、「心的物理的生の統一」(Einheit des psychophysischen Lebens)から成立し、又「非有機的自然」から「有機的生」(das organische Leben)という中間肢を経て生じた世界であって、精神的生は物理的なものを地盤にして現れる進化の最高段階である、と考えられている。この点で彼は、基本的に進化論の見地に立脚していると言える。しかしこの場合彼は、物理的自然界と精神的歴史界とを同種の連続において把える訳ではなく、飽くまで異種的なもの、いわば<非連続の連続>において把えていると思われる。即ち基本的に前者は外的であり、後者は内的であるという質的相違がありつつ、なお同時に両者は一定の関係の内にある訳である。但しここにみられる内と外との質的種別的差異の根底には、直接的な意識主観に立脚する近代的な意識の立場の前提がある。そしてこの前提が即かつ対的にみて絶対的拠点となされるとき、この直接的意識現象の立場は、ディルタイ自ら言う「主観性の形而上学」となる。従って彼の強調する内的－外的の差異は、飽くまで意識主観にとって相対的である、と考えられるべきであろう。

2. 体験及び生

ディルタイにおいて精神的歴史界の構成成分は「心的物理的生の統一」であり、これにおいて様々な精神的営みを結合している内的連関が、「心的構造」(Psychische Struktur)と言われる。但し生の連関は、多年に渡る実的な生経過(Lebensverlauf)の単なる外的な模写像(Abbild)といったものではなく、生そのものにおいて生の様々の立場から不断の変移の中で形成される。それ自体動的な統一構造なのである。ここに構造は、「精神的生の活ける秩序(Anordnung)」とみられる。又、Ichが(「近さ」や「抵抗」の関係にある)事物や人間との係りの内に有る生の事態が、Ichの「生の係り合い」(Lebensbezug)であり、Ichの状態性は、事物及び人間の生連関に対する関係に従って変化し、それ故生は、静的観念的な存在ではなく、常に動的な生成過程にある複合的かつ持続的な連関として動的統一を成すのである。そしてこの統一体が「自己」(Selbst)である。かく「心的物理的経過は統一性をもっており、意識におけるその経過の各部分は、持続や連関や自同性(Selbigkeit)の体験によって結びつけられている。」

ところでディルタイ哲学の出発点となるのは「生」であるが、この「生という表現は、精神科学においては人間世界への制限の内で行われる」とされる。つまり「生」という概念は、物理的自然をも包括的に支配するカテゴリーではないとみられ、ここにディルタイが他の生の哲学者や生氣論者と異なる点を見出すことができる。この場合生は、「外界の制約下に成立する諸個人間の相互作用の連関」であり、又かかる「相互作用が、因果法則に従い身体において心的経過の領域をも共に包括する自然客体の連関(Zusammenhang von Naturobjekten)に、その内で制約されている連関」なのであって、「生の統一の相互作用」において成立するとみられる。ここで、「相異った人格間の相互作用」として一般的に表現されるのが「体験」である。体

験は、「心的連関」の部分としてそれに係っている。この「心的連関の直観形成において根拠づけるものは、構造や一定の態度において根拠づけられた体験の構造統一や体験の構造的な相互関係や、結局諸態度の相互の構造関係やの事態」である。体験は「質的存在であり、即ち覚知 (Innewerden) により決定されうるものだけでなく区別されぬものにまでも及ぶ実在性」である。そしてそれは、かかる実在性として「生の構造連関」を含むのである。

又さらにすべての体験は「内容」(Inhalt)を含んでいる。即ちIch (Subjekt)は、他者や事物という対象(対象的世界)に対し一定の態度 (Verhaltensweise) をとり、働きかけ作用するが、ここに体験の「内容性」(Inhaltlichkeit)が生ずる。かく一定の体験の内に、作用と内容性との間の内的関係が見出され、この関係の性格が、内容性に対する「態度」である。態度と内容の間には、構造統一としての内的関係があつて、ここに「構造的精神的連関」の概念が成立する。かくて体験は、「態度と内容の構造的統一」として把握されるが、態度と内容は、「私にとって現に有る」(für-mich-Dasein)つまり「覚知して有る」(Bewußt-Sein)ことであり、この意識性が体験(Erleben)であると言えよう。体験の事実は、「吾々にとって現に有る、吾々に与えられて有る、意識の事実である」ということとして実在性なのである。ここに吾々の生は、時間の中で意識によって現れてくる過程 (Vorgang) において成立することになる。しかも「体験においては、内在 (Innesein) と私がそれに内在する内容とは一である。」

ところでかかる内在的・内容的体験、内から観られた生に対して、対象は「部分的」に超越しており、この超越 (Transzendenz) は、体験そのものにも、把握が体験に対してもつ認識論的關係の内にも基いている、とみられる。このいわば同時的共存的次元での超越関係に加え、通時的継起的次元での超越が考えられる。即ち、現在の体験の内に生きている意識に対する、想起された体験の超越である。^{注1}そしてこの体験がもつ超越意識の出現についての客観的根拠は、「時間経過とそれを統握する想起」とみられる。そしてかかる共存的及び継起的な超越との緊張関係をもった内在的心的統一が体験であると言えよう。

ところで体験は、究極において概念に解消されぬ非合理的な深みをもつとされる。「生という時計の発条」は、「衝動と感情の束」とみられる。ディルタイにとって感情 (Gefühl) は、「生そのものの意味が全面的かつ根源的に開示される地平」^{注2}であり、「衝動」は、哲学的宗教的志向の如きをも含む精神の合目的的發展の前進力である。彼は体験を、大きく「把握体験」、「感情体験」及び「意志体験」に類型的に区分するが、しかし人間性の本質を、これらの Totalität 即ち、"wollend-fühlend-vorstellendes Wesen" として把握するのである。つまり彼において Subjekt の基体 (ὑποκειμενον) を成すのは、カントの <Ich denke> に代る、いわば <Ich erlebe> であると言えようが、しかしこの場合、三分法的に知情意を以て人間本性全体、精神的生の Totalität とする彼の構成は、テーテンスからカントを経て伝えられた見方をそのまま継承するものであつて、この分類そのものの妥当如何は問題とされていない。しかしともかく「心の生き生きした連関」(der lebendige-

Zusammenhang der Seele) が生なのであり、かかる Gemüt の生動的全体として扱えられた生は、凡ゆる認識に先立って現存するとみられる。言うならば、体験我が認識我に先存する訳である。そしてこの連関の徴表は、「生動性」(Lebendigkeit)、「歴史性」、「自由」、「発展」である。しかもこの生動性は「理性以上のもの」であり、「理性の法廷の前にもたらされえぬ」とされる。つまりディルタイの出発点は、単なる理性ではなく、常に上の如き生とその Totalität という根本の事実なのである。ここに心的生の発展は「無限の過程」であり、生の根拠は、合理的説明の網の目から如何にしても漏れる生それ自体の無限の深みに求められる。かかるディルタイの立場は、主知主義的イデアリスムスに対しては体験事実の全体主義に拠るレアリスムスとは言えるが、より端的には、合理性を排拒する訳ではないにしても、非合理主義的な生の内在的心理主義であると思われる。

他方「個人的生経験は、諸個人に共通する諸命題に表現されるような普遍的生経験に拡張される」のであり、単一な生の統一は、全体的な精神世界に属するのであり、かくて生は、「その素材に従って歴史と一であって、歴史の各点に存している。」又生は、「時間におけるその進歩とそうして生ずる作用連関との内で把握される限り、歴史的である。」そもそも歴史の概念は、生の概念に依存しており、歴史的な生は、「生一般(体験と理解において与えられるもの)の一部分」とみられる。「歴史の全ての部分の内にかつ全ての精神科学的概念の内に含まれる完全で自己内完結した明瞭に境界づけられた出来事」は、誕生と死により限界せられた連関を形成する「生経過」(Lebensverlauf)なのである。^{注3} 到る所で歴史を貫徹している諸連関は、宗教、芸術、国家、政治的又宗教的な組織といった「文化体系」や「社会の外的組織態」であるが、この諸連関において最も根源的なものは、「個人が影響を受けたり、反作用したりする環境における、個人の生経過」とされるのである。それ故、かかる「生経過」として「心的統一構造」を形成する實在性としての体験、つまり「生の作用連関において主体が精神的及び物理的環境に係るところの体験」が、歴史的世界の「原細胞」(Urzell)となるものであり、従って「歴史の連関は、生がその自然的環境の制約下で連関を生じる限り、生の連関そのものである」とみられる。即ち生一般の領域と歴史的な精神的世界とは完全に相合するのである。

以上ディルタイにおいては、全ての合理的説明がその深みから派出する内的生は、哲学にとっても歴史にとっても、「非合理的のアプリオリ」にして「質料のアプリオリ」^{注4}を成すものと考えられており、その限りで、単に意識の直接与件としての確実性を越えた一種の形而上学的前提という性格を、「生」は担ってくるのである。

注1. しかし、かかる「超越」は、可想的な超越であって、「実的」な超越ではない。存在論的にみれば、過去は最早なく、未来は未だないのであるから。

注2. ディルタイにおいて感情は、思惟によって分解しえぬ深みをもっており、しかも「対象感情」(Gegenstandsgefühl)よりも根源的な深い感情は、「状況感情」(Lagesgefühl = Stimmung)と呼ばれ、「理解」の契機とみられているが、しかし正しくこの「状況感情」は、状況において、さらには状況が状況として成り立ってくる

場において、根源的に生ずるものとして把握することを要するであろう。そしてこの「状況感情＝気分」の深みこそ、単なる主観的心理に閉鎖しえぬ、いわば存在論的な場が開示されうる契機として把えうるであろう。しかしディルタイではこれは問題とされず、後の実存論哲学、特にハイデッガーが、この *Stimmung* のもつ存在論的事態を究明したのである。

注3. 歴史的世界性をもった全体的生が、「生一般」とか「生そのもの」と表現されるに對し、個々人において成立する個別的生は「生経過」又は「生の統一」(*Lebenseinheit*)と言われ、両者の間には、「対象一般」と具体的な特定の対象との間にみられるような区別がある。

注4. Diwald; W. Dilthey, Erkenntnistheorie u. philosophie der Geschichte, S. 114,

3. 体験を成す生経過のもつ時間性

次に、前述の体験及び生が、如何に時間性 (*Zeitlichkeit*) と係っているかを検討したい。

ディルタイによると、生は、「常に到る所で場所的時間的に規定されており、いわば生の統一における経過の空間・時間的秩序^{注1}において場所を定められる」のであり、それ故又、「生の経過にとっての共通の意義により結合される生の諸部分の包括的統一」たる体験も、「次の瞬間が常に前の瞬間に基いて築かれる故に、全ての状態が明確な対象となる以前に変化してしまい、又全ての契機が把えられる以前に過去となるような、時間における経過」として把握されるのである。かかる心的生経過は、「過程」(*Vorgänge*) から成立するが、全ての「過程」は、時間の内に起源をもち、時間において変化する訳である。かく生経過の内には、「生の時間の規定」が含まれている。ここに時間性は、「他の一切のカテゴリ的規定を基礎づける生の第一のカテゴリ的規定」であり、それは既に「生経過」という表現そのものに示されていると言える。

では時間をディルタイは如何に把えるか。「時間は、吾々の意識の統括的統一 (*zusammenfassende Einheit*) を通して、吾々にとって現に有る」と彼は言う。しかも時間は、「現在 (*Gegenwart*) の不断の進行」として経験される訳である。この「現在」は、体験の「実在性による時間契機の充足」であり、吾々が「吾々の心力の総体」(*Totalität unserer Gemütskräfte*) が動く実在性の充実に於いて体験する場合、それは常に有る。否厳密には「現在は決して有るのではなく」(*Gegenwart ist niemals*)、不断に流れ進行するのである。かくて「吾々にとって現に有る全てのものは、只そのようなものとして現在において与えられたものである」という「体験命題」が成立する。かかる直接的な体験的実在性に満たされた現在に対して、「過去」(*Vergangenheit*) 及び「未来」(*Zukunft*) は、結局「表象像」(*Vorstellungsbilder*) であって、この過去や未来の表象は、現在において生きている者にとってのみ有ると言える。即ち体験の現在、

「想起 (Erinnerung) において過去の表象を、又その可能性を追う想像力とこの可能性の下で目的を定める能動性 (Aktivität) とにおいて未来の表象を含んでいる。」かく過去に満たされ、未来を自らに担っている現在、は、体験的質的にして主観的の性格をもつ。そしてこの現在中心的な時間把握は、神学的背景を度外視する限り、アウグスチヌスのそれに一脈通ずるものである。

又時間は、「単に等価的諸部分から成る直線ではなく、諸関係や諸継起や同時性や持続やの体系」なのであり、「現在的なものが、その内で絶えず過去となり、将来的なものが現在となるところの現在の不断の進行において成立する具体的時間 (konkrete Zeit)」ということもできる。しかしディルタイの言う現在、は、果して厳密な意味での「現在」であろうか。彼は、「時間経過は厳密な意味で体験しえぬ」と考えており、「過ぎ去ったものの臨在 (Präsenz) が、直接的体験の代りになっている」と言う。つまり「吾々が現在として体験するものは、まさに現在したものの想起を常に包蔵する」(傍点筆者) のであり、換言すると、想起における過ぎ去ったものの臨在が、現在として体験されるのである。従ってディルタイにおける体験しうる限りの現在とは、実は厳密な意味での「瞬間」 (Augenblick) を喪失した意識としての現在であり、ハイデッガー的に言えば、「非本来的現在」としての「現前化」 (Gegenwärtigung) に属するのであろう。そしてそれは、「瞬間」を開示するハイデッガーの志向的な意志時間に対して、体験の基調をなす Gemüt に基く感情時間とも言うものであって、「瞬間」よりはむしろ「既有性」 (Gewesenheit) を主導契機とする「現在」であるように思われる。それは、どちらかと言えば、受容的意識に根づいており、未来 (将来) への行為的・実践的企投という契機に関しては甚だ稀薄なのである。そしてディルタイ史観の根底に存する美的・観想的・諦観的態度も、根源的にはかかる時間把握に由来すると言えるであろう。

ところで他方、ディルタイの言う「生経過」は、生の統一を秩序づける「歴史的経過」 (geschichtlicher Verlauf) において反復される。つまり、「歴史的経過の基礎の上に、過去・現在・未来の契機を生の統一として統括する生経過が成り立つ」訳である。そして「全ての人間の現実を貫徹する時間の流れは、歴史的世界においても、又それを考察する私自身においても同一のものである。」ここに「生の領域は、時間経過におけるその客観態として、つまり時間及び尽力 (Erwirken) の関係に従った構築 (Aufbau) として把握されるならば、歴史 (Geschichte) である。」かくて「時間性」は、生と歴史の世界を根源的に制約しているとされるが、しかしこの「時間性」と「歴史性」 (Geschichtlichkeit) とは混同されてはならない。一方で確かに「時間性」と「歴史性」とは規定関係にある。即ち、「歴史性」は、「時間性」そのものに依存した高次のカテゴリーである。「歴史性」のカテゴリーは、体験と結びついた内的かつ主観的な「時間性」から導出されていると言ってよいであろう。他方しかし、「時間性」は、「歴史性」にとって実的に構成的であるとは言えない。「時間性は全ての現存 (Dasein) を包括するが、歴史性は種別的であり」、^{注2}それは個別性、一回性、特殊性、反復不可能性と密接に結びついているのである。従って、歴史的なものを単なる「時間性」に限定し、

基けるのは誤りであると言うべきである。包括的なカテゴリーとしての「時間性」は、単に精神的歴史界を貫徹するのみでなく、物理的自然界にも妥当する一般性をもっているのである。そしてこの包括的形式のカテゴリーに制約されながらも、次に、精神的生の連関の実的な生きた実在性という性格をもつ「生のカテゴリー」が成り立ち、これの上層にさらに、歴史的・作用連関の個別性の契機に定位する「歴史のカテゴリー」が成り立っている、とみることができる。諸カテゴリーを、かかる三重の層（形式包括的カテゴリー・生のカテゴリー・歴史のカテゴリー）の下に区分したところに、ディルタイの苦心がうかがえよう。

さて以上に述べた通り、「体験」は、「心的・物理的生の統一」における体験として、身体を媒介にして物理的自然に制約され、又、歴史的・精神的表現的世界の「心的構造連関」と「歴史的・作用連関」とに実的に制約されて成立するのである。しかもそれは、内在的な意識の直接与件として、上のような相対的諸連関の内に、Im-Leben-seinとして組み込まれているのである。かく生や歴史を、本質的に諸連関そのものの相対性に根づいてみるといたところに、ディルタイがいわゆる「歴史的相対主義」と呼ばれる所以もある訳である。

注1. 人間の生の現存は、単に時間的であるだけでなく、身体性を介して空間的でもあるのである。しかしディルタイでは、歴史的世界の空間的側面は余り重視されず、このことは「精神史」としての彼の歴史把握にも示されている。もっとも彼の「構造連関」は、歴史的生の空間的側面とも考えられるが、しかしそれは、心理学的空間というべき内在化された空間であって、従ってものでは真の実在性を欠如した極めて抽象的な空間性と言わねばならないであろう。

注2. ディヴァルト、前掲書、S. 84. (以下、上)

(哲学(哲学)博士課程1回生)